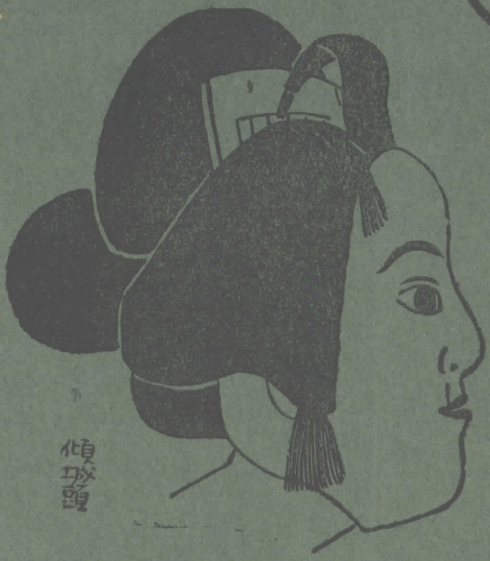
太棹



第百十七號

東京 太棹社 發行

酒寮　よしの

深川區清澄町三ノ六
（電停區役所前）
電話本所四〇八一番

シルウア・ハウス

蒲田區御園町二ノ一四
電話蒲田三六二一番

松幸

すき焼
和洋御料理
淺草公園（千束二ノ三四）
牛鍋本店
電話根岸(87)〔〇三八〇番
〕二〇〇〇番

風流・金ぷら・茶漬
【美地句】
大はま屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

太棹

八月

第百十七號

祝紀元二千六百年

祈皇軍武運長久

（掲載芳名順不同）

東都五十義會

事務所

本所區東兩國二丁目四番地
(細川方)電話本所〇八一八番

暑中御見舞

五聲會

事務所　本郷區龍岡町二二
電話　小石川　五八〇〇番

中老會

事務所　淺草區千束町二丁目一九〇
電話　根岸　一一五二番

暑中御見舞

芳聲會

里辰一千清

芳壽重壺芳

（イロハ順）

豐澤芳太郎

九皐會

淺草區石濱二丁目六

駒登會

芝區高輪南町三〇

暑中御見舞

淨雲會

（イロハ順）

木村一司　上杉文盛
安藤都昇　湯淺光玉
安藤都竹　澤部其角
久米中次　三並義昌
岡本柳光　村上美津豆
野田高尾　打矢晋水
川口子太郎

事務所　京橋區槇町三ノ五
（川口子太郎方）
電話京橋四八七七番

暑中御見舞

淨曲無名會

（イロハ順）

安藤どくろ
保々長平
河野國聲
高瀨操
桑原美峰

（後見）

鈴木和樂
星野桔梗

事務所
神田區花房町三
（河野方）
電話下谷五四〇〇番

互調會

淨聲會

暑中御見舞

榮義會

（イロハ順）

井田菊泉
岡野人
松岡語松
小長谷たかし
荒木泉
北村三葵
木村さかえ
鶴澤寛三郎

事務員　中居謙次郎

鳥の會

（イロハ順）

栗原千鶴
片山つばめ
中島山鳥
鈴木兒雀
塚口清雀

事務所　京橋區築地二丁目一五（栗原方）
電話京橋四四五四番

事務員　中居謙次郎

暑中御見舞

朝見會

叶會

香伯會

鶴澤觀西翁

暑中御見舞

九重會

吉岡十八公
栗原千鶴
松尾武市
河野國聲
九里香候
保谷紅司
中島古平
星野桔梗
高瀬操
伊藤松鶴
平山平茶
塚口清雀

（イロハ順）

事務所　京橋區築地二丁目一五
（栗原方）電話京橋四四五四番

義松會

三口松藤
田中司若
澤部其角
加藤綠
高山高峰
中村小六
向坂万喜
豊澤松造
豊澤松四郎

暑中御見舞

素玄淨曲研究會

日本醫師素義聯盟

東都杏義會

豐島區千早町二丁目三七

岡田蝶花形

電話落合長崎三〇四七番

三好會

つま子　喜三香　信子
歌子　濃昇　繁昇
知晟

本宅　岐阜縣武儀郡菅田町
寓居　小石川區水道端町一ノ二三
小石川區江戸川町一一

義太夫研究所　戸塚方　三好

電話小石川一五〇六番

暑中御見舞

巴津天會

會長 寶藏寺天昇

顧問 竹本巴津昇

相談役 宮島和紅

常務理事 武藤壽昇

事務長 長谷川勇昇

事務所

杉並區和田本町九五一

竹本巴津昇方

電話中野五七九三番

暑中御見舞

向島 竹翠會 會員一同

山田義昇

女天會

事務所 本所區向島須崎町八六（久叶家方）

電話 墨田 五〇六八番

久叶家 黑川叶

暑中御見舞

したしみ會

（順ハロイ）

林和勢
中野吳羽
石川華笑
中野清子

事務員　中居謙次郎

田中湖月

柳有明

暑中御見舞

十喜和會

事務所　京橋區木挽町四ノ二
佐倉屋旅館方
豐澤廣助
電話京橋五四四番

三並義昌

大森區馬込町
西四ノ三〇一三
電話大森(06)二六九四番
八〇二三番

巴雪會

阿部一

米澤雅樂

荏原區小山町七九
電話荏原(08)六六一一番

暑中御見舞

安藤ごくろ

暑中御見舞

白井清華

金田金鳳

暑中御見舞

青山和狂

日本橋區人形町三ノ三
電話(66)一八五八・一九五八番

和田金扇

暑中御見舞

中澤巴

暑中御見舞

坂倉素遊

高瀨操

暑中御見舞

近江秀明

暑中御見舞

鈴木松寶

暑中御見舞

齋藤山生

小林和舟

暑中御見舞

及川旭

京濱素義聯盟會長

國友東光

品川區大井
水神町二〇三六

大築葵

暑中御見舞

小林太二八

勝田松雨

暑中御見舞

武笠宏亮

松岡語松

暑中御見舞

松岡茂里雄	藤本喜鳳
野口みなと	平山平茶

暑中御見舞

大用大嘉津	菊地秋月
乃村乃菊	平井榮

暑中御見舞

吉川浪補	岩木義雀
廣瀨いろは	緒方千晴

暑中御見舞

原田越巴	淺田奇聲
壽改メ 水戸部いづみ	小川都山 小川都川

暑中御見舞

鈴木和樂	高橋可遊
坂本あるを 電話淺草八七八二番	寺岡三幸

暑中御見舞

長谷川文久
星野桔梗
吉田三芳
高瀬操
安藤光樂

（イロハ順）

暑中御見舞

神馬里芳 鶴澤勝助	歸山歸世花
吉田登盛 野澤粂造	

暑中御見舞

日本義太夫因會

男子部一同

事務所　日本橋區蠣殼町一丁目六

電話茅場町一九二七番

日本義太夫因會

女子部一同

臨時事務所　下谷區敷寄屋町十七番地

電話下谷四八九一番

奉暑中御清邊伺

東京人形淨瑠璃復興會

南北座

電話大崎三八二一九番

暑中御見舞

竹本都太夫

鶴澤司好

野澤語左衛門

鶴澤寛三郎

野澤道之助

暑中御見舞

竹本朝見太夫

竹本素女

淺草公園
義太夫座
橘館
江戸館

竹本駒若

淺草區田島町三七
電話淺草三六三〇番

女義

若女會

事務所　芝區西久保巴町四一
（竹本素女方）
電話芝二五七七番

暑中御見舞

竹本佳照

豊竹昇登

豊竹巴住

女歌舞伎

阪東勝治劇身振舞踊協會

座員一同

太夫元　魁家廣丸

事務所　東京府下吉祥寺二七四三

電話吉祥寺五〇番

暑中御見舞

大阪 八千代會

大連 旭勝會

大連市信濃町四一
電話二、七〇七五番

日本大阪囚會

男女 太夫三味線一同

事務所 大阪市住吉區長峡町四七 村上卯之吉方

暑中御見舞

安東運送業組合
組合長　岩崎虎一
山彦

岡田源
兵庫縣垂水町

川奈部銀司
千葉縣船橋町

暑中御見舞

株式會社

大彌商會

八幡市通町十六丁目
電話 八四八・一五六〇番
二四六六・專用一番

古賀大彌
古賀房千代
古賀昇之助
古賀おゝ茶

（社員）
皆上九洲翁
稲田稲雀

濱口肩衣店

濱口秋華

日本橋區人形町一ノ七
電話茅場町二六三五番

東京市指定

手塚佐市商店

てづか

水道衛生器具
瓦斯電氣器具
汚水淨化裝置
暖房給湯工事
水道衛生工事

東京市京橋區西八丁堀四ノ二ノ一
電話 京橋(56)一三四一番
振替 東京九一二一三番

暑中御見舞

製函
製材
土木
建築
運送
勞力供給
演藝部

業

寵寅商店

保良鈴鳳

本部 下關市

出張所（東京●横濱●名古屋●京都●大阪●神戸●廣島●小野田●門司●戸畑）

運送部（代表）長四一一番
建築部（代表）一四七六番
製函部（代表）〇七一七番
演藝部（代表）二四六六番
電話 一七一二番・二二九〇番・二八四八番

名古屋株式一般取引

長尾仙昇

電話千草一〇二四番

奉天市大和區春日市場前

吉野井筒

暑中御見舞

金井辰稻
埼玉縣本庄町本町
電話本庄二〇八番

奥村鑛業所
常呂鐵山事務所
奥村三玉
北見國常呂郡常呂村太茶苗
電話一二番

小島古清
川崎市大師山門前

朝鮮文藝社
社長
鈴木健正

暑中御見舞

大垣市城畔
吉岡十八公

滿洲國安東市九番通二丁目
金桶暉鳳
（安東素義文樂會假事務所）

大阪市東區兩替町一ノ二三
西村紫紅

京城府日ノ出町一三
志岐紫扇

暑中御見舞

名物 御守最中

うろこ餅

みのり

高級あられ五種の詰合
御進物用……金壹圓より

煉羊羹

★★★★趣味の名菓
名なし草
★★★★

花の名にちなめる小形菓子
三十餘種を取あはせたる純
江戸趣味の御菓子
御進物用かん入
風流壺入
はかり賣金八拾錢より

日本橋水天宮前

三原堂本店

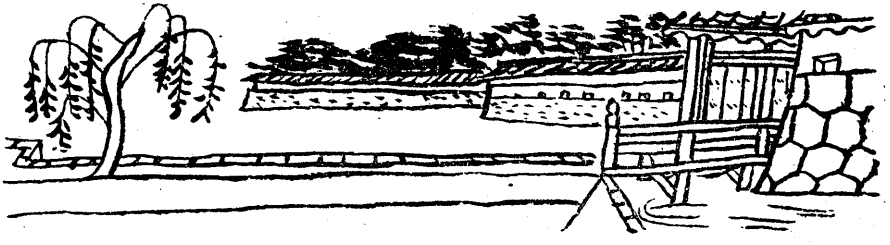
電話茅場町二六六六番

太棹社

富取芳河士
同　三久子
關本邦治

栗原印刷所

牛込區早稲田町五八
電話牛込一四五一番



太棹　第百十七號目次

座主の出雲と操り劇の組立……（二）……是澤九似廬……（二）
文樂に希望二つ……河竹繁俊……（七）
文樂樂屋圖繪……宮尾しげを……（八）
塵外居放談……煙亭記……（一〇）
ラヂオ淨曲漫評……金王丸……（一三）
新口村（考證）……西村游史……（一九）
義太夫論……新藤泰觀……（二三）
素義人描……內田富太郎……（二四）
執拗な天狗雜誌……煙亭生……（二五）
淨雲會第六回記錄……川口子太郎……（二六）
卅六七年頃の素義界……井上泉……（二七）
淨界消息……（二八）
太棹社彙報……（二九）
各地通信……（三二）
當座帖……（三四）
編輯後記……芳河士記……（三四）
表紙・カット……宮尾しげを……
近作……（渡邊湖畔）……佐渡俳句會……

座主の出雲と操劇の組立（三）

是澤九似廬

斯道の異端者、初代義太夫は、淨瑠璃の外殼を捨て、內部の精神を把り、新流義太夫節を編み出し、試練の中途から之を受け繼いで、大成さしたのは二世義太夫であり、人形淨瑠璃を劇化して三人遣ひに改め、組立を完成さしたのは、座主の竹田出雲である。

出雲が自ら創作を分擔して、大當りをとつた「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」の操狂言五段目立ての組立と、內部の組織、書き卸し當時の太夫、三絃、人形遣ひの慨略を解說して見やう。

大序語りの辛慘と組立の變遷

菅原傳授手習鑑、五段目立て。

初段、大序、大內の段、竹本此太夫、菅相亟に對しての事件の發端。

この時代の大序は、物事の最初と云ふ意味から、技量の備はる切語りの太夫に、多くの場合語らして居る、一說には、太夫、三絃が小人數なりしために、切語り三人の太夫には、段切の外に端場を一段簾內で語るべき義務があつたものと云ひ傳へられて居る、この組立は、現今では文樂座には遺つて居らず、不思議と、阿波、淡路の操芝居には昔の儘で踏襲せられて居るとのことである。

後世になつて、文樂座の大序は、修行中の太夫、三絃衆の藝の養成に開放せられて、幾十人ある下積の太夫、三絃彈きは、玄人となる資格を作る基礎がためとして、どんな天才肌の人でも一應は必ずこの大序を勉むべきで、幾人かゞ替る替るに五行か、七行を語つたもので、三日に一度か、五日に一度しか、自分の順番は廻つて來ず、この間は稽古本を持つて、出語り床下、裏側、簾內などに潛り込んで、先輩の太夫の語り風、三味線の朱附けを、一生懸命で記入したもので、この苦行を積む中に、先輩に力量を見出されて、替り役でも振られると、これが出世する糸口となつたもので、始めて序中に進む順序となる譯で、この修行中の苦勞は、骨を削り、肉を殺ぐ思ひで、その上に勘定方から貰ふ給料は、明治二十五六年頃までは、眞の太夫と三絃が十五日間で金五十錢ぐら

いであつたと聽いて居る、諸國から來る素人衆の天狗が、文樂の太夫になりたくて、傳手を求めて入座して觀ると、この大序語りの修行には流石に堪えられず、大低のものは無斷でこそ〳〵と逃げ出す譯で、餘程の辛抱力があり、身體が剛健でなくては、この荒修行はつゞけられるものでない。

これは單り太夫ばかりでなく、三味線彈きも同樣に、難行苦行をしたものである。

初段、序中、賀茂堤の段、竹本百合太夫、大序の接續であり、櫻丸の事件の發端。

この百合太夫は、初代政太夫（二世義太夫播磨少掾）の門下で、元文六年出座して居り、例の忠臣藏事件のときに、此太夫と共に脫退して、東の芝居に轉勤し、寶曆十三年まで豐竹百合太夫の名で、東の座に在勤して居る。

同、序切、筆道傳授の段、竹本錦太夫、武部源藏に對する事件の發端。

この序切を語つて居る、初代錦太夫は、素と初代政太夫の引き立てた門人で、元文六年豐竹和佐太夫と稱して、東の芝居に在勤し、延享元年退座して、西の座に入座し、竹本と改む、序切を語つて居るほどの人故に、相當の實力が備はつた太夫ならん。

太夫は端場を語つて一人前

昔から端場を語らして貰ひ、序切が語れたら最早立派な一人前の太夫で、樂屋でも、押しも押されもせぬ譯で、それまでは（因會の中老格以下）冬季でも、樂屋座蒲團を敷くことが出來ず、羽織を着ることも許されず、草履も皮のせきだを履くことさへも嚴禁せられ、淺裏草履に、樂屋內では冷飯辨當で、梅干か、澤庵漬の外は贅澤の食事と見做されて、喰えない規約となつて居たほどで、切場太夫が歸るまでは、外出することさへ止められて、先輩には絕對服從主義であり、床着、肩衣、その他の世話は勿論のこと、師匠の肩揉み、風呂流し、下駄直しまでさせられたものである、三味線彈きも同樣で、端場を彈き、序切を彈けば一人前で、なまなかの修行では、玆まで進むは容易の苦勞ではなかつたのである。

二段目、道行、詞の甘替、紋太夫、柚太夫。

この初代紋太夫も、播磨少掾喜敎門下の逸足で、元文六年竹本座へ出座したが、延享四年豐竹座へ轉勤して、豐竹上總太夫と改名し、寬延元年竹本座に再勤して、舊名の紋太夫に復名した、この道行を語つた紋太夫は、初代でなく、二世紋太夫であると某書に記載してあるが、二世は倉太夫と稱して二世政太夫の取立てた門弟で、寬延三年に出座して、寶曆十一年に隱退して居る。西の座で、この「菅原傳授」を初演したのは、延享三年八月であるから、二世紋太夫では、年號が合はぬ處がある、再調して發表する。

二段目、口、汐待の段、　竹本島太夫。

同、　切、道明寺の段、竹本政太夫。

菅相丞と、苅屋姫の生別、覺壽母子の件、
發端から解決まで。
この二段目切道明寺は、位ひどりを主要とした語り物、覺壽が相丞の叔母君としての貫祿、伏籠の内にある苅屋姫と、よそながら生別の苦腦、古來から二段目切場として、最も至難な風格物。

二世政太夫の德望

この政太夫は、播磨少掾(二世義太夫)の末弟で、當時の藝界に於ける君子人であつたと云はれて居る、その人物と技倆とを見込で、同門の人々から押立てられて、二世政太夫を襲名したほどの人德家、俗に西口政太夫と稱され、寛保三年に出座して、藝の修行中に初代に病歿せられ、その後は、此太夫を師と仰ぎ、後見役と賴んで藝を磨き、初代の名跡を恥かしめず、例の忠臣藏九段目事件で、此太夫は東の座に轉勤したが、自分は竹本座の孤壘を護つて、終始一貫座主の出雲を佐けて、初代義太夫以來の傳統ある竹本座の礎石を搖がさなかつた、偉勳と功績は、流石二世の後繼者として立派な行動、淨瑠璃は非常に上手の人ではなかつたと云はれて居るが、事實は顯明せぬ、時代物を得意とした、大音量の太夫であり、品格の備つた語り口は、眞西風の藝であつたと想像せらる。
三段目、口、車曳の段、竹本百合太夫。
白太夫、賀の祝ひの前段、松王、梅王、櫻王丸の、三ツ兒の出合ひ、時平の七笑ひと太夫の儲け場、七笑ひは後世になつてから出來た、太夫の藝格と力量を見せた技巧の笑ひが、型となつて遺されたものと云はれて居る。
三段目、切、佐田村の段、竹本此太夫。
この切は、全段の正念場、貫祿と實力とが具備した座頭格の役場、三段目切は、藝力よりも、音聲に品位を重しとする風格もの、松、梅、櫻の三本に膳を据えて白太夫の挨拶、櫻丸の切腹、八重の悲歎、恩愛うれいの念佛、鐘と撞木の介錯、段切の節附の餘情と悽慘、京都の片田舎に今でも遺る舍人詞、河内地の音遺ひ、此太夫風の重厚味。
三絃も同樣で、藝に貫祿がなくては彈けぬ三段目の切場。

東の筑前風と、西の此太夫風

此太夫は、西の芝居開始のときから出演して居た、陸奥茂太夫の門人中での逸才で、陸奥伊太夫、俗に合羽太夫と稱され(合羽業)、後に竹本美濃太夫と改め、二世義太夫歿後は、竹本座付の總後見とも云ふべき、同座唯一の巨匠で、太夫の座頭をつとめ、藝の實力と貫祿を具備した、所謂、三段目切を語り、當時の三段目切は、本太夫役場と稱したもので、(全段中で第一の難場を語つたもの)計らず寛永元年の忠臣藏書卸し初演のとき、吉田文三郎との口論に端を發して(後段に記す)遂に豐竹座に轉じ、同座の太夫座頭となり、陸奥此太夫と稱せしが、寛延二年九月、豐竹筑前少掾を拜受し、寶

曆七年八月、一世一代「清和源氏十二段」を勤め、明和五年十一月行年六十九歳で歿して居る、非常な大音の太夫ではなかりしも、情味を語り活かすことに妙を得て、この人獨自の風格は、西の座に「此太夫風」を遺し、東の座に「筑前風」を傳へて居る、稀世の名人であつたと謂はれて居る。

四段目、口、筑紫配處の段、竹本政太夫。
同、　跡、天拜山飛梅の段、太夫不詳。
同、　中、北嵯峨の隱家、竹本錦太夫。
同、　切、手習兒屋の段、竹本島太夫。
松王と源藏が互に苦衷の解決、劇の頂點、手習兒屋が、西風四段目切として語るべき起原。

竹本島太夫が語り始めた手習兒屋

初めは志摩太夫と稱して、二世義太夫の門人、元文四年に西の芝居へ出演して「ひらがな盛衰記」の笹引を語つて好評をうけたのが、出世の糸口となり延享二年島太夫と改名し、播磨少掾の死後は、此太夫の預り弟子で、例の忠臣藏事件で此太夫と共に、東の座に轉じて、豐竹島太夫と改め、寛延三年八月、二世豐竹若太夫を襲名した、寶曆十四年初代若太夫(越前少掾)の歿後は、東の芝居も暫く閉鎖の悲運に遭ひ、明和三年正月西の座に復歸して、同五年に檜下に据つたが、同六年東の座が再興することになつて、自から座主の一人に加つて、豐竹和歌三太夫、豐竹駒太夫の三人看板で經營したが天明三年病氣退座、同四年九月歿した。上手であり、巧者な語り口であつたと云はれで居る。名人越前少掾の前名である若太夫二世を襲名したほどの藝才のあつた太夫、餘程の巨匠であつたことに相違はない。

五段目、大内の段、竹本友太夫。
菅相丞、櫻丸事變解決と、全段の終結。

友太夫も播磨少掾門下、延享七年此太夫の門弟となり、例の忠臣藏事件のとき師匠此太夫と行動を共にした。

「菅原傳授手習鑑」は、出雲、松洛、千柳、小出雲四人の合作で、種々の傳說が遺つて居る、延享三年春興行の「楠昔噺」が大當りをとつて、その振舞酒宴の席上で、豫てからの腹案であつた、巢林翁作「天神記」を原として、趣向を變へて菅公左遷の史實に據つて、親子別れと、三ツ兒といふことを課題に仕組んで、闇を引ひて持場を定め、二段目の道明寺を松洛、三段目賀の祝ひを千柳、四段目の手習兒屋を出雲が擔當することゝなり、書卸したのがこの「菅原傳授」で、之を上演したのは、延享三年八月二十一日初日で、大當りで日延べ〳〵で、翌四年三月まで、二百日に渉つて大入滿員を續けたと云はれて居る、この作は、日本歷史、政治上での確執者、藤原時平と、菅原道實の兩者を把へて、構想上の雄大さと、道實左遷といふ好題目に偏く同情が蒐まつたとゝ、三ツ兒と云ふ嶄新で奇拔な趣向が成功した譯で、太夫には、此太夫、島太夫、政太夫の切語りの三人衆があり、三絃は、竹澤伊左

衞門、初代鶴澤友次郎が居り、人形遣ひは、古今の名人の稱ある、吉田文三郎が、菅相亟、白太夫、千代の三役を遣ひ、吉田才治が、松王丸、宿彌太郎を遣ふて、大好評を拍したと云はれて居る。吉田文三郎が考案した、いろ〳〵の事實は「淨瑠璃譜」に記載せられて居るから、之を略した。菅相亟の裝束に梅鉢の紋を用ひたことは、文三郎の發案で、今もつて歌舞伎劇にまでも、この傳統が遺つて居り、松王、梅王、櫻丸三ツ兒ともに惣髮で、衣裳は黃色の大角縞模樣の郡內織を用ひ、八掛は紅色を用ひて居る、之も文三郎の發案である。(車曳衣裳參照)

菅相亟の人形を遣ふものは、每朝別火を食して、水垢離をとり、體を淸淨にしたもので、樂屋內では、相亟の人形は荒薦を敷き、御神酒を捧げて、禮拜することが嘉例となつて居る、現在でも文樂座はこの傳統に從ふて居る筈である。

三ツ兒の發端は、當時大阪天滿にあつた事實を把へて來て脚色したと云はれて居り、白太夫は、四郎九郎であり、武部源藏は、傳內流の筆道指南の祖、建部傳內から來た考案であると謂はれて居る。

三人遣ひの人形の濫觴

序に述べるが、一人遣ひの人形が、淨瑠璃節と合流して、操芝居となつたのは、薩摩淨雲時代と謂はれて居るが、年代は顯然として居らぬ、一人遣ひを、三人遣ひに改めたのは、竹田出雲時代で、享保十九年十月同人作「蘆屋道滿大內鑑」を書卸し初演のときからで、與勘平、彌勘平の人形に三人遣ひを用ひたことが濫觴で、頭と右手を主役が遣ひ、左手をワキ役が遣ひ、一人が足を遣ふて見ると、人形の動作が自由であり、進退と立居も自在であり、姿と形、表情も極めて面白く、觀衆に大好評を拍し、漸次人形全部を三人遣ひに改造したもので、人形の寫實本意と變遷して、藝が次第に向上せられたことは、座主出雲の努力によるもので、彼が非凡の活眼であつたことも、窺ひ知れるのである。

この淨瑠璃の價値は、全段を通じて繪畫化した、縹緲夢幻の情景であり、主從、親子の忠義の象徵が、日本精神化せられて居り、その節附が、音樂詩的の優秀さを推奬される譯で大近松時代に比じて、構想上の進歩が著しく操劇化して居る。牛飼舍人の四郎九郎(白太夫)の三ツ兒の一人梅王が、松王と櫻丸に比較して、創作上から觀て、その働きが何となく物足りなさを感じ、充分に描寫せられて居らぬことは、合作上から來た缺陷かと思はれる。

× × × ×

文樂に希望二つ

河竹繁俊

一つは古典藝術普及に對してです。但しこれは、興行者側への希望かも知れません。文樂藝術を觀衆乃至聽衆に、分かり易くするやうな方法を講じては如何。具體案は特別に持ちませんが、例へば、プログラムにより、或ひは場内アナウンス等によりまして。通の方には目ざはり耳ざはりかもしれませんが、後への傳承のためには役立ちませう。

もう一つは、人形遣ひ諸君が頭巾を用ひるやうに主張していたゞきたいのですが、どうでせう。これは觀客誘導其の他の理由から相當困難なのかもしれませんが、人形藝術のためには、一日の演目三分の二までは頭巾を用ひての演出であつてほしいと考へます。

近作

湖畔　渡邊彰

與竹雨先生外數子會於芝山嵯峨亭席上卽賦

飛花掠酒月侵筵　薄夜芝山春欲烟　隨處江湖才
偶來京國會諸賢　襟懷豈有風塵宛　交誼偏欣
咳唾成珠驚一座　竹翁醉劈薛濤箋

柳橋某旗亭小飲呈竹雨先生

差池燕影掠羅幃　簷外斜陽一半微　柳敢新綿春澹蕩
人逢舊雨夢依稀　題詩唯好烏絲展　捧盞何妨紅袖圍
慚我吟懷老來減　更無佳句報珠璣

上越線卽目

清水嶺高雲半藏　人從鳥背度羊腸　洞門盡處奔湍白
巖角欹邊亂木蒼　猶見殘氷封澗道　轉憐春草滿陂塘
江干不絕野春響　竹筧杉籬似我鄉
峽中猶見古風存　略彴斜通薛荔門　歸雁影橫峰勢峻
浴鳧心穩水流暄　花含嵐氣生春暈　草帶陽炎入燒痕
沽酒車窓謀一醉　亂山孤驛正黃昏

樂　樂　文

ろいろいの形人

「若　男」

若男とは文字の如く若い男の役に使用するかしらの稱です。たとへば「妹脊山」に出てくる采女之助「二十四孝」の勝頼「千本櫻」の彌助「太功記」十段目に初の方に出てくる上下姿の重次郎が、この若男役の判りやすい例です。

この若男の人形には、手も若男の手といふものを使用いたします、一名袴手とも云ふもので、かせ手といふ一番多く使用される手の少し小ぶりのものであります。

繪圖屋

宮尾しげを

「源太」

「源太」かしらは重次郎、三浦之助、八幡太郎、義經などに使はれてゐます。この源太の中にも、若いのと、老けたのがあるので、「若源太」「老け源太」と呼んでゐます。老けた源太は、現在では「靈坂」の澤市がそれであります。若い、老けたと云ふても實は人形の製作者の一本の刀の動きで出來たもので、旅興行の際、かしらが足りぬと若源太を使ふところを、普通の源太を使用する事もあります。

塵外居放談

煙亭記

桐竹紋十郎絶交さる

――吉田玉造の孫富崎大檢校から

文樂の文五郎、紋十郎一派が近來しきりに他流の唄上るりで人形を使ひはじめた事に就ではとかくの議論もあり、それが、本質的に操り藝術としての存在價値は皆無といつてよく、又、藝祖の供養塔建立の擧も、人形道全體の總意によつて企て爲されなかつたのは遺憾である、といふ說は、嘗て、都新聞の安藤鶴夫君が、同紙上で手痛く批難され、當時、我等も同感至極と思つた事である。

他流を地方(ちかた)として人形を使ふのは、惡く言へば人氣藝人の浮氣か道樂かと評してもよく、それが決して、人形界の爲め淨曲會の爲めに喜ぶべき現象であるかどうか、少くとも、文樂の衰運をどうにかするといふ運動には役立つとは思はれぬが、パツと光るやうな線香花火的な景氣を見れば、如何にもそれは結構な事であると思はれぬでもないから、一方には、これを奬勵する輩も出て來るのである。又、これを禁止するといふ理由もなく、方法もなく、これも御時世で致方なしか、といふ事になり又、或は將來、本行の文樂が滅亡し去つて、この浮氣藝術が、天下に覇を稱へ、勝てば官軍の名譽を擔うかも知れぬのである。

近頃盛んに行はれる文樂人の歌舞伎出演にしてからが、同じくさうである。心ある淨曲の愛好者や、又た其道の上座にある人達でも、眉をひそめて『困つたものだ』といふ考へは多分に有つてゐるのだが、さて、それを止める力は無いのである。現に、古靱太夫といふあれだけの大家が、門弟の織太夫等が、歌舞伎へ出るといふ事に對してもどうする事も出來ず、內心腐つてゐるらしく、何分にも主人にも均しい會社(松竹)の命令ではあり、更らに、出演者にすればいやな話しだが、身上(お給金)が少くとも五割以上も多いのだから……といふ次第であるといふ。これは御時世である。

昔、伊井、河合が女夫劇といふのを組織して盛んに新派を發展させてゐた時に、故人になつた中內蝶二君などが顧問になり拔け驅けて活動寫眞(映畫の事ですぞ)に出る者があると、直ちにこれを馘にするといふ規約を造つて　行した事がある。それが今日ではどうであるか、何事も御時世である。今やそれをどうのかうのといふ我等は、唯だあたまが古いんだといふ事になるだけである。あゝ！

これまでは、實は餘談のやうなもので、僕が玆に言はうとするのは、この冒頭に書いた浮氣藝術と供養塔建立に就て、紋十郎に關するニュース(少々古いが)である。

先づ最近七月三十日の都新聞一面に、箏曲の大家宮城道雄氏がものした『人形の夕』と題する隨筆を見る。

『文樂の人形使ひの紋十郎氏が私の所へ來られて、自分は箏の地で人形を使ってみたいから私に何かやってくれないかといふ事であつた。そして今度催す會は昔から人形使ひの中に惠まれない人があつてお墓もなく無緣佛となつてゐる人が澤山あるので人形の夕を催してその純益で無緣佛のお墓を建てたい、そして師匠の文五郎の達者なうちに是非完成したいといふのであつた。紋十郎氏の話しぶりは大阪辨で率直なので私も大變好きになつて贊成した。

といふのがその隨筆の書出しで秋風の曲を選んで大阪の楳茂都陸平の振り付けも出來、軍人會館で盛況裡に催された事が書いてある。

此の事件(もをかしいが)が、これは實に昨年十一月の事であつて、宮城氏は無論何にも知らぬ譯であらうが、元來此問題は紋十郎がその以前から、青山の生田流の大檢校富崎春昇師の處へ持込み、いろ〳〵と示敎を仰ぎ『文樂の人形に就ては、御緣故があるお師匠さんの事であり此の企てが、愈々となれば、是非お師匠さんにお願ひ致します』と頼んでゐた件なのである。

富崎檢校は、人も知る文樂の人形で紋下になつた故名人吉田玉造の嫡孫で、父は即ち吉田玉助であり、先代桐竹紋十郎との緣故も深い關係から、文樂の連中は上京すれば多くこの青山の門をくゞつて何くれと世話になるのである。無論紋十郎も其一人で、この供養塔建立に就ても眞ッ先に示敎を仰ぎ、種々段取などもつけて貰つた譯であつたのだが、その後パッタリと來なくなつた。恰ど其頃富崎師の方では美喜子夫人が重病に罹つても居た事だから、取紛れてゐると、或る日某蓄音器會社が富崎師の曲をレコードに納める事があつて、青山の邸へ來て、實は今宮城さんの處で『秋風の曲』を入れて來ましたが、これは文樂の紋十郎が人形を使ふ爲めに、大阪へ送つて、楳茂登の振を付けるのです、といふやうな訊きもせぬ事を喋舌つたので、富崎師は、其時既に、あれほど度々内へ來て此の事の相談をしてゐた紋十郎が、と、可なり不快の念を有つたなどの挿話も思へば皮肉な事である。

愈々軍人會館で人形の夕が催されたのは十一月二十七、八、九の三日間であつたが、富崎檢校の藝の上でも片腕と頼んでゐた最愛の美喜子夫人が、病革まつて逝去したのは、其の月の二十二日であつた。この凶報は當時新聞にも傳へられるし、關係者の知らぬものも無いに拘はらずそのズッと前から上京してゐた紋十郎が端書一本の弔詞も寄越さず、會を終へてその儘歸阪してしまつたのに至つては、さすがに溫厚の老檢校も今の藝人はかうも人を踏付けにするものかと、嚇怒せずにはゐられなかつたのである。

以前から文樂東上の都度紋十郎は手土産を携へて後援を頼みに來るので、必らず金一封を與へ、時には組見を催した事も一再でなかつたが、あまりいろ〳〵の文樂人の來訪に、とてもやりきれぬ、とあつて、金一封の中味を半減した、それ以來、紋十郎自身は顔を出さず、文

之助や紋司やの弟子を使ひに寄越すやうになつた『彼の連中は總てさうした人達ぢや』と富崎檢校は笑つて語つた事もある。

越えて幾日、舞踊家藤間壽右衛門は紋十郎を連れて青山の富崎邸を訪れ、叩頭陳謝する場面を見せた。壽右衛門は富崎檢校の主宰する箏曲温心會へ餘興的に出演するので、常に青山に出入する、そして紋十郎の息子がこの壽右衛門の許に舞踊の内弟子になつてゐる。

前述の如く、餘りにも仁義を知らぬ紋十郎に慣遷してゐる事を知つた笹川臨風博士が、紋十郎に會つた時にこれを傳へ、紋十郎は、最早今になつては、一人で檢校を訪れる面ひか無い處から、この壽右衛門を頼んで、連れて行つて貰つたのであつた。富崎檢校は、此の時斷乎之を肯き入れなかつた。

紋十郎は自分の知らぬ間に、東京の後援會の連中が、宮城さんの方へお願ひして總て曲も振りも出來てしまつたので、どうしても先生の方へといふ譯にゆかなかつたのだ、と、しきりに彼の箏曲「秋風の曲」の言譯をするのであつた。そして、恐る〳〵壽右衛門の後ろの方から美喜子夫人への供物を差出すのであつた。

富崎檢校は、じッとして言ふだけ言はしてから『いや、そりやあんたが今、百万ダラ言譯した處であかん。一體あの人形はあんたが使うのやろ、あんたが主でする仕事やろ、後援會とやらが、どうせうと實は此の事に前々から富崎さんの方へ願うてあるのやから一應斷はらん事には、と言へん筈はないわ、後援會云々といふのはそりやあんたの言譯に過ぎやへん、も今となつては仕方ない。それにこのお供物も……壽右衛門はんのお土産は頂ておきますが、あんたの分は、佛になつた美喜子が面白う思はんによつて、受け兼れるどうぞ持つてお歸り、そして今後もう〳〵内へは足ぶみせんとおいて貰ひまへう』といふやうな譯で、檢校は紋十郎の面前に於て、壽右衛門立會ひの上に明らかに絶交を宣言したのであつた。

處がこの後援會云々の遁辭はあまりにも明白に、半年の後今度、都新聞紙上に於ける宮城道雄氏の隨筆で判明してゐるのである。紋十郎が宮城氏へ頼みに行つた時は富崎先生にこれ〳〵かく〳〵などはオクビにも出さなかつたに違ひなく、それから今後紋十郎は、最早大威張りで宮城氏でも、菊原氏でも頼んで踊りまくる事が出來るやうに、富崎檢校とは縁が切れたのである。

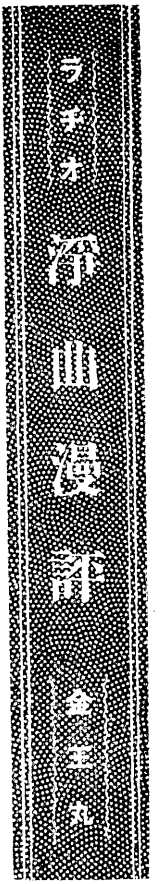
他流の唄上るりで、花々しく人形を使つてヤンヤの喝采を博する人氣男紋十郎の世の中である、藝祖玉造、玉助、先代紋十郎などの靈は、地下にどんな顔をしてゐる事であらう。

今月文樂一座は明治座に來てゐるが、七月三十一日までは、文五郎紋十郎の姿は、青山の富崎邸に現はれなかつたやうだ。あッたり前でせう。

◇

◇

◇



文樂紋下〔七月三日〕

楠昔噺

＝德太夫住家の段

竹本津太夫

紋鶴澤重造

聽取者五百萬突破のお祝ひ豪華版の內だらうか、紋下の津太夫が、去る五月に文樂座に藝能祭として上演した楠昔噺を放送した。シカモ時間をたツぷり取つて丸一時間、グツと落着いて、充分に聽かす三段目の切『早や夕陽も傾く頃…』と德太夫住家の段である。たしかこれは、攝津大掾引退の時の演し物であつたと覺えるが、どことといつて、振り廻はすサハリもなく、例のドンブリコに續いての爺と婆、それから照葉とおとは、初めて會つたあいあけ同志のやりとりから、奧が公綱と楠の思はぬ出會ひまで、義理人情の皮肉な經緯をおもふさま搦ませて、老夫婦の臨終など、息をゆるめさせぬ大物で、末段、照葉おとはの立て引きの處數枚や、楠が藁人形の奇計のくだりなぞ、一二ケ所をぬいた外、全段をつかれも見せぬ津太夫の熱演は、たしかに我等を傾聽させて呉れたのであつたが、前段の爺と婆とのやりとりが、例の堅過ぎて、昔しばなしの二人としては、チトどうかとおもつたが、あいあけどしの皮肉なやりとり、山科の戸無瀨とお石をおもはせるあたり、さすがに、鮮やかに語り分けられておもしろく、兩女が孫達の祝言を承知せぬより『もうよい〳〵、のう婆、早や日も暮れた、看經しませう、佛壇へ御明かし上げて……』から、入りにけりまでの覺悟定めた爺と婆の淋しきおもかげが目に見えるやう、こゝらは誠に名人の

暑中御見舞

竹本津太夫

豐竹古靱太夫

藝に近いとおもつた。老人夫婦の自害を知つて、照葉のくやみ言『仕様もやうもあるべきに、お心早き御最期と、悔み涙に祖父は起き立ち』のあたり、重造の絃と、恐ろしくチグハグになつて聽えたのには、又例の紋下が、とおもはずハツとなつた位、ひあいな一くだりであつたが『矢ツぱり聟の智慧なるぞや』など、アノ高い聲が、よく届いて豪いとおもつた楠の公綱呼び止めから、勇ましい段切りの『素より仁義の楠も、睨合ふたる目は涙、互ひに待つとも待たぬとも、云はで別るゝ猛將勇將……』と、尼ケ崎の段切そのまゝに、中々樂しめた一段であつた。

文樂中繼〔七月九日〕

傾城反魂香　‖吃又平名筆の段

豊竹呂太夫
絃　野澤吉左
ツレ彈　豊澤團伊三
鶴澤清友

丸一時間、丸一段。一座のドツサリ處を承はつて、紋下並みの語り物を提げての呂太夫氏、懸命の努力を要する譯である。スタヂオからでなく、文樂座七月興行の中繼であつて見れば、決して浮かめて語り捨てるやうな事のあらう筈もなければ、勿論大緊張の舞臺である。懸命の努力、大緊張の舞臺は、よく判るが、それにしては、今一ト息とおもはれる節が全段を通じて各所にあつたのは、語り場語り物の深か過ぎ、大き過ぎた爲め、緊張し過ぎ、考へ過ぎた結果であつたものと思はせられた。おくりが濟んで、爰に土佐の末弟浮世又平云々の、おき淨るりともいふ處、先づ震え聲の息切れが、マイクを通してしきりに聽こえる。お德の長しやべりも、作者の狙つたこちの人の吃りに對照させるつべこべには、今一ト際の鮮やかさを要求したい。奥へ行つて「おとましの氣ちがひや」のあたりは、却つて氣がはいつてゐて頗る可かつた。又平は、吃りにかなりの苦心が拂はれてゐたやうだが、これ亦た今一ト息の鍛練と工夫を要するは勿論にして「吃でなく

暑中御見舞

竹本錣太夫

豊竹呂太夫

ほ斯うはあるまい、エ、恨めしい咽ぶえを、かき破つて……』のごときも、懸命は則ち懸命ながら、悲痛の場面が聽衆に盛り上つて徹底しない憾みは無かつたか『サ、又平殿、覺悟さつしやれ』も聲かふるえて今一ト息『名は石魂にとどまれと』は立派に出來後の『忝けなしと口吃り』や『嬉しナナナナン泣くこそ』など先づ〳〵良好、臺がしらの舞以下段切に及んでは無事と評すべきものであつた。雅樂の助の御註進は勇ましく出來、將監は今少しくどうにかならぬかと思つた。吉左の絃も無事御苦勞の部であつたが、野澤、鶴澤、豊澤と三人並んでのツレ彈も無事過ぎるほど無事であつた。

東京女義〔七月十六日〕

傾城阿波の鳴門 ‖順禮歌の段

竹本越道
紘豊竹巴住

新聞ラヂオ版の紹介に、越道さんを東京女義界の重鎭と書いてあつたが、重鎭は少し重も過ぎる、尤も、さて外に誰れを重鎭とすべきかとなると、素女さん以外は問題だが、越道さんあたりは先づ花形といふ處だらう。閑話休題。大體から言つて越道さんは、藝が素直で、たしかに筋の良い人である。近年メキ〳〵と上達を示してゐるのは頼もしく、ラヂオだけでも、昨年の『草履打』など傑作であつたと記憶する。其後『義太夫物語』とかいふのに、御殿を語つたが、これはAKの企が惡くて、我等感服しなかつたが今夜の放送は、多分それ以來の久し振りであると思ふ。鳴門半段に四十分の時間を與へられたのであるから、悠揚迫らず頗るおちついて語つてゐた。そして、その大體を評すれば、平凡といへば惡いやうだが、至つて無事な出來榮えであつたと言へる。最初の『ふるさとを、はる〳〵こゝへ紀三井寺』の順禮歌は、モツト無邪氣に、普通に唄つて欲しい、アレデハ少しウレイを持たせ過ぎてゐた、恰ど柳の木ヤリの和歌の浦には、と、次の無殘なるかな、との違ひのやうでありたい、と不圖思つた。それからお鶴を今一

暑中御見舞

竹本南部太夫

鶴澤道八

ト息可憐に、ツマリいたいけに聽こえるやうに願ひたかつた。例の『夜は抱かれて寢やしやんす云々』の『うらやましうどざんす』などは大變あはれによく出來た。『人の軒の下に寢て……』のあと『逢ひたいとつちや』は今一ト工夫が望ましい。お弓は少し泣き過ぎる感があつたが『イヤ待てしばし』や『ま一度顏をと引寄せて……離れがたなき』など大に良かつた。最後の狂氣半分半分は……も、ハツキリ假名が解つて結構、道は親子の別れ道までゝ時間一パイ。巴住さんの紘は近頃ズツとコンビらしく、よく語らせる撥剌き、遺憾なき出來であつたと賞める。

大阪女義〔七月廿三日〕

增補大江山 ＝戾橋の段

扇折若菜實は惡鬼　豐竹呂之助
渡邊綱　豐竹昇之助
紘　豐澤力松
ツレ彈　豐澤仙作
お囃子　望月太津吉社中

實の處、率直に、齒に衣着せぬ批評をすれば、この戾橋は、開き直つて聽くに堪えぬ代物であつた。全國放送の甄右衞門の物語「太閤記」の連續を犧牲に（これも實は大したものではないが）するほどの義太夫では無かつた。殊に時間を五十分取つてあつて、其實は終ひに約十分近い空間を生したなどは、蓋しBKのゾロツヘエを具體化したものであつた。お囃子をつけて、大衆を胡麻化し去らうといふ……ま、それも仕方が無いが、先づ昇之助孃の綱のか弱さ、駒澤治郎左衞門が、勝賴實は蓑作といつた位の押出しのシカモ氣の長さ加減、それに呂之助孃の若菜の凄味皆無のベタ〳〵てイヤらしい言葉使ひ、特に耳立上方訛りは、テツ以上の變挺なもの、空もかすみて八重一重の舞になつても、不明瞭を極めたもので見現なしに來て、稍やドスを用ゐ、鳴物を入れたので、段切は、アハヽ鬼になつたかといふ次第である。この戾橋は過般文樂の大隅太夫と錣太夫で、相當結構な處を放送してゐるので、殊に情けなかつ

暑中御見舞	
豐澤廣助	鶴澤清六

た。要するに、人選と演し物の撰擇をあやまつてゐたBK近來の失敗ものである。酷評多罪

東京女義〔七月廿五日〕

朝顔日記 ‖宿屋の段

深雪　竹本素女
德右衛門　竹本素廣
駒澤　竹本素八
岩代　竹本素次
川越し　竹本素國
紘　鶴澤紘敎
箏　山室千代子

病蓐にあるとか聞いた素女さんが一門をズラリ並へて、朝貌の宿屋をカケ合に常は三味線すら人に持たせぬ素女さんとしては、珍奇な企畫、それも病氣の爲めであらうか、箏に本職の山田流を賴んだ事も御趣向、と思ひはしたが、當夜如何とも致し難い時間の都合で、直接に聽聞の出來なかつた事は殘念至極であつた。

大阪女義〔七月廿八日〕

觀音靈驗記 ‖澤市内の段

彈語り　竹本小仙

別府の海軍病院から、傷病將士慰問の午後として中繼である。前が漫才、あとが浪花節、その間に挾つて、わが小仙さんは、壺坂の前半を熱演するのである。先づ、夢が浮世か、浮世が夢か、から、次の『鳥の聲……落ちて流るゝ……』の地唄が、立派に、めくら聲になつてゐたのに敬服する。それから、地イロにおいて、往々、古靱さんの聲音が聽かれるのにも、ひねきの我等には興味がもてた。お里の言葉に實があり情が籠るのにも感服する。澤市の『いつそ死んでものけうえゝツ、イヤサあの……』や『月日の經はア、早いもなア』なぞ巧さ、別に、タレギタ式に振廻はさずにゐて、三つちかいの兄さん以下の聽かせドコロが、情もあり艶もある、完璧の壺坂であつた。時間の都合で、山の段が全然聽かれなかつ

暑中御見舞

鶴澤寛治郎

鶴澤重造

たのは、殘念であると、大に推賞しておく。

大阪女義

〔七月三十日〕

傾城戀飛脚 ‖新口村の段

竹本三蝶
紘豊澤仙平

これを本格的に難かしく考へれば、攝津大椽さへ、滅多に思ふやう語れなかつたといふ新口村。けれど、駈け出しの口語りでも、五色の聲を發して『大阪を立退いて』と振り廻せば、搏手喝采されるといふ艶物であつて、女義の演しものとしては、先づよろしいものである。三蝶さんは昨年の末であつたか、同じく仙平さんの後で『御殿』を聽かしてから久振りの放送『孫右衛門な老足の……』から段切まで、聲こそ美くしいが、ついとほりのタレギタ式でなく、しつくりと梅川の情緒を出してゐた。孫右衛門の『覺悟きはめて名乘つて出い』から、次の『ア、今ぢや無い〳〵』の間がちよつと延びたのは、本格か知らぬが、我等は息をつめられず氣のぬける感がした、ほんの二タ呼吸位の事である。『是非も無や』もよく通り、梅川の『お心ついたこのお金、さかさまながら、頂きます』の減法巧まかつたのが耳に殘る。例の『とゞかぬ聲』もよく通つて、仙平さんの撥音のうつくしいのと共に、ちよつと聽きほれたことであつた。

暑中御見舞

野澤勝平

大阪市北區曾根崎新地二ノ五
電話 北一三五八番

暑中御見舞

桐竹門造
乙女文樂

桐竹紋十郎

新口村（考證）

西村游史

一、大阪堂島藏屋敷

霜月廿五日、此日忠兵衞の家卽ち大阪淡路町龜屋へ大阪堂島藏屋敷から甚內といふ侍が來て「江戸から爲替三百兩旣に着いて居る筈、なぜ金を屆けないか」と催促である、手代の伊兵衞が「まだ參つてゐませぬ」と宥めて歸す、その三百兩が忠兵衞が封を切つた金で所謂封切りがそれである。甚內の歸つた跡へ中の島丹波屋八右衞門の使が來て「江戸小舟町の米問屋から送つて來た爲替五十兩がまだ屆かぬ不埒ぢや」と之又催促して歸つた。

二、原本は近松の作

近松文豪は五十九歳の作であるが實に若々しい妙文で寶永八年に竹本座に上演した冥途の飛脚である。此の名のついたのは近松は「一度は思案二は無思案三度飛脚戻れば合せて六道の冥途の飛脚」とからつけたのである。

此近松の原作を改作したものに紀海音の傾城三度笠がある、又菅專助、若竹笛躬のけいせい戀飛脚がある、此の新口村は此改作ものである、安永二年十二月曾根崎芝居に上演したものである。又天保元年北堀江の操芝居に戀飛脚大和往來として上演して居る。

三、けいせい戀飛脚

菅專助、若竹笛躬のけいせい戀飛脚は上卷生玉の段、飛脚屋の段、下卷西横堀新町の段新口村の段となつて居る。

飛脚屋の段といふのが淡路町龜屋の段新町の段が名高い越後屋での封印切りで

暑中御見舞

箱根强羅溫泉
茶代廢止
觀光旅館
電話宮ノ下二一六〇番 三一一番

鶴卷溫泉
小田急鶴卷溫泉下車
光鶴園
電話伊勢原一一番

ある。

四、實　說

忠兵衛は青年の頃大和の新口村で隣家の因州の浪人の娘お吉と心守くなり、その浪人は他に緣付けんとしたが、忠兵衛を思つて親の言ふ事を聞かなかつた爲め浪人はその娘を責めたが少し嚴し過ぎ遂に過つてお吉を殺した、忠兵衛の親勝木孫右衛門(實際は增田忠左工門といふ)も申譯無いと思ひ傳手を求め大阪の飛脚屋龜屋の養子にやつた、養母を妙閑といひ許嫁のおすわといふのがあつた。

忠兵衛もこんな事から初めの程は愼んで居たが大阪へ來てから當時流行の凧揚げで糸が切れて凧が新町の槌屋の屋根へ落ちたのを拾ひに行つて二階の梅川を見染めてから係り合ひとなつた。一說には忠兵衛が北の新地を通つて居た時に鼻紙が落ちたのを梅川が拾つて渡したのが緣となつたとあるが、恐らく前說が正しいと思ふ。

五、原作と改作との異る所

大阪を立退いての文句は近松は新口村につく迄に書いて居るが、菅若竹の改作は新口村に着いてから述懷して居る。

近松は孫右衛門が忠兵衛の體にも觸れないのは大阪の義理を充分感得して大阪に申譯ないとして忠兵衛を見たいことは山々なれども遂に見もせず體にも觸れなかつた。

改作は目かくしして體に觸れて居る。

六、弦掛の藤兵衛

弦掛は弓の弦を掛ける職人商賣をして居る藤兵衛で、八十八で一升の飯も殘さぬ達者物年は丁度九十五といふのが近松で改作は錢百ぢやとしてある、錢百とは九十の長壽としてお上から錢百文を敬老の意味で褒美として貰つたことは德川時代に行はれたものである、近松の作と改作とは五歲の差がある。

七、十七軒の飛脚仲間

當時大阪に十八軒の飛脚屋仲間があつたとある、冥途の飛脚上卷には十八軒とあり下卷の新口村に十七軒とあるのは龜屋が後には新口村迄搜しに行くことはないから除いて居る。

併し飛脚屋の事は十七屋と稱すること

暑中御見舞

名作淨瑠璃同好會

事務所　京橋區槇町三丁目五
川口子太郎方　(電話京橋四八七七番)

は事實である、月の名前から出て居る、十六夜は「いざよいの月」十七夜は「たちまち月」十八夜は「まち月」といふ、たちまちつくは飛脚屋の屋號である。東海道には江戸から京都までに十七軒の繼ぎ飛脚があつた、之も十七屋といつて居る。

八、廿日餘りに四十兩

大阪を立退いて廿日餘りに四十兩費ひ果して二分殘るといふ大阪堂島藏屋敷の三百兩から勘定して見ると算用が合はない、先づ八右衞門に五十兩返濟し槌屋の女將お清に百十兩梅川の身請け（百六十兩の内五十兩は八右衞門の爲替を手附に置いたのである）五兩はやり手のばゝに四十五兩は前月迄の締切勘定、二十兩は締切後の借り、十兩は槌屋の茶代三兩はおりんお玉五兵衞への祝儀合計二百三十八兩であるから六十二兩ある筈だが二十二兩の差のあるのは忠兵衞の費ひ途が一向分らぬ事になる。併し四十兩といふのは口調の上からと四と死といふ關係から修飾したのではあるまいか。

九、知音

知と音とは最も親しい友である、昔支那に伯牙といふ琴の名手があつてその友の鐘子期といふ人は伯牙の琴の音を能く聞く人であつたが鐘子期が亡くなつた爲め伯牙は琴糸を切つて爾來琴を彈じなかつたといふ故事から來たものである。

一〇、善知鳥（うとう）

謠には幽靈となつて善知鳥を殺した獵師の苦しむ所である。此鳥は親が子を愛することと甚しく之を忠兵衞の親孫右衞門とに譬へたものである、親は「うとう」と子は「安方」と鳴くといふ說から來たもので昔は今の青森縣北津輕郡外ケ濱に居たもので、今は北海道に居りそれでも青森市の安方町に善知鳥神社がある。

暑中御見舞

貸席 並木倶樂部

淺草・雷門

電話淺草一二三五番

義太夫席として皆樣のお氣に召す倶樂部でございます。

乘物は電車・バス・地下鐵いづれも雷門下車直ぐ近間でございます。

鹽谷鵜平氏より

—岐阜市外—

吉岡十八公さんを成程知つてゐらるゝはづですナ、そのうち一度彼氏の養老山千歲樓へお出であれ。

鵜飼みてねたるホテルの驟雨はしらず

おもひどほり塗りあげた畦踏むでないぞ

いづれ異國の眞つかな百合の花だ名は不問

義太夫論（其日庵稿）二

新藤泰觀

二、芝居の始元

以上の如き系統と歴史とを以て前代未聞の繁榮を極めたる義太夫節は、當時殆んど人心の全部を支配せんとする勢となれり。何れの頃か此の義太夫節の興隆に對し沛雨に雷霆を副ふるが如き援勢を爲したるものは歌舞伎芝居の發生なり。（余之を京都の古老に聞くお國の咄等は別なり）京都祇園町の興業師仁幸なる者此義太夫節の旺盛なるを見て、新機軸を案出し、今若し彼義太夫節の人形芝居を改新して代るに人を扮裝して彼の詞を云はしめ、太夫をして地合のみを謳はしめなば、動作彌々眞に迫りて、人心の好嗜に適する事更に疑ひある可からずと頻に工夫を凝らせども、當時斯樣に馬鹿氣たる人形の代用をする者なきより風斗とした思付きより、四條河原の辻藝人を收傭し、當時小說の挿繪師滑川國丸の畫を基として疊及顏の色彩より裝束の配合に至る迄を案配し、始めて祇園坂下廣小路に於て若竹花太夫、小嵐龍紋の看板を揭げて歌舞伎芝居を興行したるに其繁榮殊に甚しく、一の外題を三月より六月迄も興行したることありしと云ふ。此故に今尙俳優の姓氏に京丹波の村名を存するは即ち其因證なり。市川中村嵐片岡尾上等皆大道若しくは河原藝人の出所たりし村名なりと（未だ其是非を知らず）此芝居の興行一度世に行はるゝや靡然として天下の藝界を席捲し、官民上下知愚賢凡の別なく之を見物するに晨に出で夜歸り、實に寢食を忘れて此の流行の技藝を追隨するの有樣なり。此に於て一時旺盛を極めたる義太夫節、人形芝居は漸次其の勢力を失墜するの止むなきに陷りしは、此に不可思議なる印象が社會道德の上に實現するに至りたる結果なるを知るべし。乃千君臣父子夫婦兄弟及男女の交情、朋友等の友誼に對する情愛の發達是れなり。其の結果あらゆる勞苦貧難死殺等人生極端の慘事を擧げて、悉く其情愛遂行の上の犧牲に供して更に遺憾なきの傾きあり。啻に遺憾なきのみならず、之を極端なる方法を以て遂行する者に對して却つて偉大なる同情と賞賛とを以て歡迎して倦まざるに至れり。之れ我國獨特の名產たる大和魂發達の隆盛時期にして、我國開闢以來如何なる學者教育家を喚起し來るも亦此の如き强大なる感化を全社會の精神に印象することは爲し能はざるべし。吾國素と文字なく典籍なく人心教育の材料としては寥々一の章祟を標彰すべきものなく、億兆の民心長く教義に渴して其の精神の發動を抑壓する玆に二千餘年、偶々謀反あり戰爭あり纂奪あり復讐あり、其の觸るる所の境遇によりて一部の發動は歷史の繼續と共に試演し來りたれども、此の如く社會全般の人情隱微に迄浸染して一齊の發動を現出せしことはあらざるべし。佛教の渡來は其教化著大なりと雖權化垂跡の方便によりて徒に現當二世安樂を說き儒教の普及充滿せりと雖徒らに內綱常の義に因循して外活潑の發揚に資せず、其督の教

義東西に馳突すれども一神空漠の存否すら信念せしむる能はず。彼れと云ひ之れと云ふも皆悉く一部の偏隅に蹌踉する議論にして未だ人生慘極の死を顧みずして遂行せんとする强大無比の感化を與ふるの勢力あるものに非らざるなり。獨り義太夫節に伴ふ人形及俳優芝居の如きは其の感化力の猛烈なる吾國に於て前古無比なりと斷言して憚らざるを信ずるなり。是れ蓋し其の太夫俳優等の妙技素より其の感化に助けあるべきは論を待たずと雖、其の狂言作者の筆力亦之れが主因たるや疑ひを容れざるなり。當時義太夫節に伴ふ狂言作者は多くは吾國に於ける有數の學者にして、深く和漢古今の書を涉獵し、東洋的教義の如何を鑒別し、隨つて其社會上政治上に發現する事柄の是非をも論議するの資格を有する者なるが、時恰も封建武門の專横に制せられ、其口を箝せられ、其筆を縛せられて不平鬱勃の間空しく糊塗に喰喝して彷徨するの砌り、一度義太夫節の世に發現するや呼嗟奔來各々競ふて著作場裏に奮鬪するに至れり。而して其の競技の決勝點とする所は、少しにても著大の感化を世人に與ふるを以て主眼とする譯故其の綴る所其の慮る處相競ふて極端より極端に馳するは勢の止むを得ざる所なり。而して其の結局は人生の極慘たる死を以て爭はざるを得ざるに至れり。此の死なるものを最終の判決として有らゆる趣向を練磨し、各々其の死方殺し方死ならざるを得ざるに至る順序、殺さざるを得ざる情實に對して種々紛糾したる手段を弄ぶも、終に其の主眼たる目的は死と云ふことに歸着せしは爭ふ可からざる事實なり。扨て此死に導き來る順序として總ての階級、君臣父子兄弟朋友或は男女相愛の狀態を捉へ來りて布演輯述する筆力文技の非凡なるは一篇の義太夫を治亂數百年の間に演藝して飽かず、巧拙數千人の藝人が演譚して倦まざるを見ても知るべし、余は此狂言の社會に及ぼしたる感化の關係を論ずるの序を以て、當時の狂言作者なるものを紹介するの必要を見るなり。

絹地・色紙・短册

下谷區仲御徒町一ノ一七

波間商店

暑中御伺

花輪◆花束◆花籠

御送迎・御佛事・御見舞は何卒弊店へ御用命願上候

新花・廉價・迅速は弊店の特色

花

下谷稻荷町（青バス車庫前）

サカタ・フロリスト

電話（下谷）六一八一番

正直に告白すれば私は操さんの淨瑠璃が好きだ。古風な陰影があつて、如何にも義太夫らしい情韻を持つ氏の藝質は、誠に聲曲をして好ましい、甘味な滋味と仄溢い良さを持つて居る。

だが其れは評者の個人的な趣味で、好きなるが故に耽評することを慎み度い、しかし公平に云つて氏は世話物の第一人者だ。

白石嘶—新口村—沼津—霊坂—なぞは氏の優秀作で、充分樂しませる、それと近來よく演られる「双蝶々曲輪日記」六つ目橋本の段が實に傑作である。

私は「橋本」を評することに依つて操氏論に代へたいと想ふ。何となれば此の一段は氏の特徴の集大成であり、持味の結晶とも思はれるからである。人物を語り分けることは淨瑠璃の要諦で、この眞髄が完全に描現出來ない限り、その義太夫はどんなに美聲妙節であらうとも、眞價には乏しいと云はなければならない。

同じ人物を語り分けるにしても、之の「橋本」は子を持つ三人の父親の年齢がほぼ同年である爲めに、其の表現は非常に至難さが伴ふ。

しかも町人山崎與次兵衛、武家橋本治部衛門、かご舁甚兵衛の三人の階級的色彩も、その人物の性格は滲じませて語られねばならない。其れを操さんは洗練されて滋味の中に、じつくりと悲愁を漲らせて見事に描寫する、加へて一脈の詩情さへ渾然と籠らせてゐる。

素義人の世話物としては正に最高峰を行く絶佳さがある。

先づ「思ひなくて藪入したき親里に…」で貞純な嫁お照のいじらしい哀れさを靜雅に展舒して行く。

「てくどかすなと刎飛ばす……」の與次兵衛と治部衛門の親なればこそ、子故の白刃の爭ひを練熟に描出する、錯雜した表現の混亂が陰影と情哀が溢れて誠に深巧だ。

治部衛門の「甚兵衛とやら頼入る……」の枯淡な云ひ廻しなぞ圓熟した滋味がある。

眼目の「昨日洗つた單衣四文が糊を棒に振つた…」の泣き陷しは眞情切々と迫つて思はず唇を嚙みしめる程深い情愛の極致を衝く。

又「いかに知らぬといふ迚も現在親に篤籠舁せ……」の吾妻のクドキなぞ妙韻哀韻津々として、世話物らしい哀艶な情趣を心情的に浮彫にする。

「粹な育ちも涙には…」切り處迄切つない甘美な情愁を漂はせて、古風な潤ひが熟然と流れる名品である。

惜むらく天二物を與へずの譬への通り、氏は時代物に稍々特徴を減殺させられる瑕瑾がある、それは巧さの不足ではなくて柄の不向に基因する。

とは云へ、老熟練巧な氏だ、もとよりその短所は得意の情深的な語り方でカバーして行くが、時として獨得の世話味がしらず〳〵の中にじみ出すことがある。

しかし何を語つても洗練された義太夫らしい、仄溢い甘美な情韻と古風な陰影がある、これは倒底一朝一夕の修業では加味されない尊い至藝的な持味である。

私は氏の語り物をして菅專助の「紙子仕立兩面鑑」大文字屋と並木千柳の「夏祭浪花鑑」三ぶの内を常々……待望してゐる。

素義人描影

高瀬操氏——世話物の巧さ

内田富太郎

なく術ない親同志が義理故に切り結ぶ眞情を切實に描映させる。

「始終殘らず立聞く甚兵衛……」で吾妻の父篤籠舁き甚兵衛の出になると、一層人物を躍動させて妙味深い。

我が娘故二人の舅が義理と義理とに是非なく爭ふ因果の白刃にたまりかねて鳴咽する甚兵衛の泣じやくりに胸を刻まれるやうな情韻がある。

どこか津太夫を思はせる、老熟した古風な

執拗な天狗雜誌

——蒸し返す二問題——

世にもうるさく、天狗雜誌の焦燥は、毎號のやうに例の問題をしつこく蒸返し、東京の岡田博士までが今更御挨拶も致し兼ねるやうな大論文を寄稿されるし、又最近は、僕の「沼津廢曲・下手糞友次郎」を讀むだらしい松本なにがしが、正に誹毀の告訴を提起するに足る無禮至極の雜言を麗々と、吾笑氏はこれに奥書を附して同誌に掲載してゐるが……これは面どくさいから此の處齒牙にかけぬ事にしておかうと思ふ。

唯だ其中で、兜會其他諸氏の天狗雜誌不買同盟に關して、吾笑氏はこれを、どうしても津太夫氏等に對する藝評の峻烈なるによつて雜誌を斷はる、といふ風に曲解し、附會して口惜しがつてゐる事である。それは決してさうでは無いのである。例の武智氏の近江清華氏に與へた罵言毒筆により、近江氏の激憤するを見て、近江氏を中心にし、近江氏を德としてゐる人々が、不買の申合せをして通告したのに過ぎず、決して藝術上の批評に對するものではない。しかし、それでは、自分の方の分が悪いから、元の起りが誌上の藝評からであつた故、この不買同盟を藝評の爲めだとすれば、事情を知らぬ人々は、こちらが、沒分曉漢(わからずや)になる、といふ寸法らしく、飽くまで、批評を嫌がつて雜誌を斷はるといふ事に仕たいらしいのは、寧ろ滑稽の感さへ起るのである。

今一つは、あの當時上京してゐた吾笑氏が近江氏邸を訪うて陳謝した、といふ事に就き岡田博士までが、煙亭は一方の話だけを聞いて、とか何とか吾笑氏が陳謝しないといふ風に書いてゐられるし、松本某も全くの虚報である、と誰れに聞いたか知らぬが言つてゐるのだが、あの時は、中澤巴氏と栗原千鶴氏とが何とか圓滿に納めやうと近江氏を訪問し、其の話しの都合で、後から來たら可からうといふ事になつてゐたのを、吾笑氏は、それこそノコ〳〵と近江邸へ出かけて行き、近江氏は會う必要はない、といふし、巴千鶴の兩氏は、中に立つて大に困り、マア〳〵折角來たものだから、といふので漸く近江氏に會はせる事にして、所謂『遺憾の意を表して』吾笑氏は引取つたのである。無論この『遺憾の意』は表面の辭令に過ぎぬ事は、僕のアノ文章の中にも書いておいた。岡田博士の書いてゐるやうに、近江氏の召喚を受けた、のでも何でも無い。寧ろ自分から進んで出かけた吾笑氏はあの場合、遺憾の意を表さなければ、どうともしろと、尻を捲る外は無い、さうすれば、千鶴氏の鐵拳は吾笑氏の頭上に飛んだかも知れぬ、アノ時の空氣や實情はさうであつたのである。其の翌日だつたか、九重會と大阪の八千代會公開の催しの並木倶樂部に、吾笑氏は顔を出して、其日、主人側の近江氏は、大に吾笑氏を歡待(或はこれも表面的であつたかも知れぬ)してゐたのを、私はたしかに見聞したのである。であるから、よし表面だけでも、吾笑氏が近江氏に對し、陳謝諒解を求めた事は、まぎれも無い事實であるのである。

もうこんな、淨曲界に取つて、實に些細な事は、蒸し返す必要も無いやうなものゝ、右の二點は今尚ほ天狗雜誌が執拗にくり返へしてゐるから、行きがゝり上、玆に太棹誌上を借用して、ザツと書くの如しである。

(煙亭生)

淨雲會第六回記錄

――七月廿五日午後一時より並木倶樂部――

川口子太郎記

連日九十五、六度の暑さを記錄し出した眞ツ晝間の一時から「車引」の掛合を開ける。從來淨雲會のメンバー十二人一日では語り切れぬので二日間づゝ二組にわけて語つてゐたのだが今回は全員總出で一日にやる一寸した大會といふ形だから、この時間にはじめなくては語り切れないので仕方がないが、强烈な色彩を見ただけでもウンザリする暑さの中で、義昌の松王、都昇の梅王、僕の櫻丸揃つて紫の童子格子をぶつかへして赤に梅松櫻の縫模樣の肩衣になる趣向で、御丁寧に肩衣を二枚も背負ひ込んだから、もう着ただけで氣が重くなつて、物を云ふのも面倒くさくなつて來る始末。然るにお客樣は早くも半分以上を數へ、遙々ると八王子から齋藤拳三氏がお纏さんをつれて見えるし、平山平茶氏、松尾武市氏、田中煙亭御夫妻迄早々と來て下さる。全く有難い事である。此暑さの中を、靑くさい義太夫がオクビの出る程出現する席へ來て下さるといふ事既に並々ならぬ御こころではある。猛夏の日射に映えた妙に明るい空氣を、いと怪しくも震動させて文盛の時平公が七笑ひをやつてゐる――妖しき眞夏の晝の夢――と云ふより、如何にも若手らしい凄まじさ。

つゞいて新加入の野田高尾――もとより僕らにとつては先輩の一人――が初ッぱなを買つて出て御披露の「合邦」平茶さんの奥さんが三味線の應援、大山一徑、柳澤吾鈴其他の素義界の方々後方に現はれて、高尾君再出發を祝はれるかの如し。其角、光玉の「太十」晋水の「組打」都竹の「酒屋」義昌の「寺子屋」――このあたり場内時ならぬ脂粉の香なまめいて、十數名の綺麗どころしきりと聲援をおくる、――扨文盛が「三代記」の前を短夜までオクリ、つゞいて僕が奥の佐々木の物語をやる。幕があくと場内の紅裙跡形もなく消え失せて――ハテ面妖な。そのかはり、松岡茂里雄、緒方千晴、高橋宮古、杉山語樂、井上和風、影山淺路などといふ素義の大先輩綺羅星の如く、殿母太夫さん新藤泰觀氏大いに聲援を送つてくれるし、この方が餘ッ程いゝ――負け惜しみぢやないぞ。

こゝで一寸休憩同人一同舞臺へ居並び、都昇と僕が口上を云ふ、都昇はイヤに落ら付き拂つてゐるが、僕は何か改まつてしやべらうとすると、却へつて「べらんめえ」になつてしまつて困つた。高瀨操氏が「おめでとう」と此時入つていらつしやつた。

次の一司が商用で間に合はぬので、折しも樂屋入りをした美津豆をいきなり舞臺へ駈け上らせる。「ならんぞ〳〵」と美津豆式大音聲二階を轟かして響いて來る樂屋では、一司君まだ來ないと進行係の其角、義昌、慌てゝる。そこへ三越の閉店と同時に駈つけた久米中次を入る間おそしと舞臺へ飛上らせる。――一方客席は晝間からの惱まされ續けられては堪らぬと見えて、げつそりお客樣減少、極めて夏向と相成る。このあたり當夜の異變である。

次いで都昇の「十種香」お客は尠いけれど素義諸先輩の中へ更に杉本英、岡田蝶花形兩氏も加はり愛する奥さん――あたり前へだ――も心配さうにしてゐたし、僕も聽いてやつたから、まあ喜べよ。

次に柳光の「鮓屋」一司の「安達」を殿りにして大切の「一力茶屋」の幕があく。佳照師の獨吟、和孝師のカゲ三味線、和光師の「あい〳〵どなさんぢやエ」宮古氏が太鼓を叩き坂本あるを氏が太鼓の叩き方をコーチしてゐるといふ下座は相當なメンバー揃ひだが、太夫達、葭間からの活躍で些かダルくなつちやつて、僕、一司、都竹が三人侍でノビた顏をして十軒店の賣殘りの如く居並べば、文盛の平右衞門も疲れて眠くなつてセリフをつかへる。久米中次の力彌が可愛らしく、美津豆晋水の名コンビの伴九太が一寸盛りかへし、光玉のおかるが一人本格的に光る。一同大ぶスランプとなつて、九時四十分打出し。樂屋で御來臨の諸先輩師匠達と同人一同睦まじく卓をならべ、手をしめて散會。次回は九月二十六、七日下谷交正倶樂部です。

× × ×

卅六年頃の素義界

舊友梅村梅聲氏より明治卅六、七年頃の番組を贈られ懷舊の念去り難く、昔の思ひ出を語るは故人と成りし友の冥福を祈り、且つは多年斯界に盡されたる生存諸氏に敬意を表すると共に、古き三十八年昔を偲ぶも亦長命の德ならん。

尙同氏は豐舟と號し彫金家にて斯道の愛好者なりと雖も、古番組を保存せらるゝを觀て趣味の深きを感ず。（井上泉記）

明治卅六年八月十六日

（吹拔亭）柳（三國）由良の湊（梅石、鶴玉）毛谷村（可笑、こん）辨上（六琴、鶴玉）野崎（秀朝、鶴玉）本下（遊鶴、鶴玉）以上全部故人。

同　七月四日

（同　亭）陣屋（紀文、文朝）堀川（和聲、團吉）沓掛（光樂、八助）壺坂（桃太郎、八助）本下（巴、團吉）宗五郎詮議（遊鶴、八助）生存者は和聲、光樂、巴、八助、（八助は文樂座の吉彌、團吉は團左衞門）

同　七月五日

（同　亭）鈴ヶ森（梅石、喜光）玉三（義笑、文朝）毛谷村（美家古、八助）白石（家内喜、八助）赤垣（和樂、團吉）油屋（士調、團吉）生存者は和樂、家内喜、喜光、八助。

同　七月九日

（同　亭）酒屋（六琴、さだ、八助）近八（南海、團光）土橋（喜光、八助）玉三（泉、八助）瀧（梅翁、八助）大切野崎（久作、梅石。お染、六琴、久松、三橋。お光、秀朝。紘、八助）生存者は喜光、泉、八助。

なほ卅六七年頃には左記の人々が表立つたものである。

和玉、和聲、和樂、巴、和十、和紫、いわね、梅翁、鹿聲、鱗、狂樂、永樂、住江、三響、梅石、秀朝、都鳥、岩井、高森、和昇（巖太夫）和鶴、遊鶴、博聲、光樂、泉、家内喜、可笑、冨士、とをる、桔梗。（生存者は和聲、和樂、巴、和昇、光樂、泉、家内喜、とをる、桔梗）

淨界消息

▼**淨瑠璃同風會**　淨瑠璃同風會は保坂有曲、星野桔梗、川口子太郎、河野國聲の四氏世話人となり八月一日「文樂を聽く會」を催す。

▼**淨瑠璃研究座談會**　第四回を八月廿五日午後三時より（住若を聽く素玄會第廿四回と合併）日比谷東洋軒にて開催。なほ第五回は九月廿一日正午より四時迄明治時代女義招待座談會を同所にて催ほす。

▼**三好會**　七月卅日牛込肴町勝岡演藝場に於ける市川團五郎一座に出演本下前（美蝶、三好）同後（三好彈語り）好評を博す。なほ同會は八月三日房總半島海水浴場にて納涼義太夫會を開催。

▼**上諏訪行き**　山田義昇氏は杉山橋氏の勸誘にて七月廿三日上諏訪へ遠征、同地に滯在中の木下松玉氏加はり片倉會館にて義太夫會を催ほし、信陽新聞後援の下に出征遺家族を以て滿員の盛況を呈し翌廿四日は蓼科溫泉高原ホテルに催ほす太十（扇華、扇之助）酒屋（松玉、扇之助）合邦（橘、駒登太夫）寺子屋（義昇、扇之助）野崎（駒登太夫、扇之助）合邦（橘、駒登太夫）陣屋（義昇、扇之助）壺坂（駒登太夫、扇之助）

▲**河野國聲氏**　努力一年餘、氏の事業は大陸に發展し天津市に於て未廣商會を設立、北京に出張所を設け、又奉天では同地素義界の重鎭吉野井筒氏と共向事業を開始。

▼**勉强會**　鶴澤綱之助師を師として稽古に精進してゐる勉强會は、淸水二樂、小林隅斗、野村潮氏なども加はり七月十三日淀橋倶樂部に第二回を催ほした出演者は右三氏の外に木村一司、米澤雅樂、保谷紅司の三氏。

▼**叶會**　黑川叶氏の「叶會」は七月卅日交正倶樂部に開催、駒蝶、蝶花叶、山生氏出演。叶氏は同會にて二段語りを勵行したものであるが、手術後二段は無理にて此頃は一段乍ら元氣は昔に變らぬ旺盛である。

▼**女天會**　同會の叶氏を始め、里芳、登盛、歸世花、加光、ひばりの有志諸氏に松玉、義昇氏等參加（紘は粂造、勝助、扇之助）八月中旬戸倉を振出しに長野、上田、諏訪、松本を巡演。

▼**金井辰稻氏**　氏は吉原の營業所を廢業し、埼玉縣本庄町の本宅にて目下靜養中。

▼**小鹽潮氏より**　拜啓暑氣凌ぎ難き候と相成候處先生始め御一同樣御起居如何に候や御伺申上候陳者小生業務多忙の爲め淨曲研究中止罷居り候處早くも四五年を經過致し、其間絶えず太棹御送附に預り誠に難有御蔭にて諸兄の御上達、躍進の趣き一々承知仕り慶賀と羨望の念に堪えざるもの有之次第に御座候先般舊友諸兄の御誘ひに依り万宇會を組織致し會員は三上榮笑、濱野若狸、荒木泉、及び小生の四人に御座候。

×――――×

太棹社彙報

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

義太夫振興會の設立

本誌が桑港の素義杉山陶岳氏を始め、西本西紫、兼廣廣玉、武榮玉、平野一昇氏等の愛讀を得てゐる事は創刊昭和三年頃よりであるが、豊竹照觀、竹本清勝師も永年在米した事もあり、嘗ては豊澤仙十郎師もロサンゼルスに渡り、相當あちらにも愛好家があるのである。

在米卅餘年世界的舞踊家として有名な伊藤道郎氏の嚴父爲吉氏は所用にて渡米を重ねるうちに、在米の第二世が眞の日本精神の理解する機會の少ないのを知り自分が卅年來やつて來た義太夫を彼等第二世に敎へ武士道を皷吹しようとカリホルニヤ・アート・クラブで米國人會員に義太夫を聽かせたのが昭和五年、爾來第二世日本人の益々義太夫の眞意を知つてこれが機となり最近では文樂の豊竹照太夫師が出張稽古するなど愈々淨曲普及も實が結びかけたわけである。氏は今回「現代日本の青年子女に正しい日本精神を植ゑつけるのは義太夫が一番だと信じる學校で敎へられた倫理學の實現に義太夫の力を大に活用したいと思ふ」とて、義太夫振興會を設立し、名譽會長に阿部信行大將、正會長として立命館大學總長中川小十郎氏、副會長に大林組社長大林義雄氏、聖路加國際病院々長久保德太郎氏を置き九月上旬軍人會館に於てその發會式を擧行する事になつたが、出演者は文樂の若手に乙女文樂が豫定されてゐる。

なほ同會の發起同人は伊藤爲吉(苦樂)安藤留吉(光樂)山田敏行(翠山)松本龜造(松壽)西村元一(紫紅)西謙吾(豊照)永田左門(喜友)の諸氏で、文藝顧問として太宰施門、田中正平、成瀨無極の三氏、竹本津太夫、鶴澤友次郎の兩師が藝術顧問となつてゐる。

新生十喜和會

松葉家豊澤廣助師が毎月出張東都に於ける稽古も久しく、曩に松葉會が組織され盛んに催ほしのあつたものだが、最近松葉會も振はず解散同樣になつた處、今度前會とすつかり顏ぶれの變つた後援者

が出來て、廣助師の毎月一週間出張稽古に專心練磨する事になり、會員十名、會名も十喜和會と命名し第一回を七月廿九、卅の兩夜相互倶樂部に於て開催したが、近く並木倶樂部で發會披露大會を催ほす由である。

會員＝北島北斗、由坂玉鳳、坂本あるを、平井軌外、井上素鳳、山下彌生、藤牧淡路、平山平茶、山田義昇、齋藤山生の十氏（以上順不同）外に前島貴昇氏が準會員として加入。

日本淨瑠璃批評聯盟の結成

純粹なる藝術批評なき處に淨瑠璃の興隆あるなく且斯道の進歩發展を期す可らず、由來素玄に拘らず淨瑠璃には阿諛的追從言辭が附物而も寧それを禮儀と心得て眞の意味の批評を動もすれば惡口と見做す傾向は憂ふべし、玆に吾人相互に聯絡淨瑠璃道發展の爲め聯盟を組織す、有志の入會を望む。――といふ趣旨にて岡田蝶花形氏の肝入りで日本淨瑠璃批評聯盟が組織された。聯盟の目的は（一）純粹なる批評家精神の涵養（二）年三回の懇談會（東京又は大阪にて）（三）批評集の出版及一般への普及等を目標とし、事務所を京橋區槇町三ノ五川口子太郎氏方に置く事になつた。

故雲雀氏七回忌追善會

東都聲義會々長たりし秋本雲雀氏逝いて既に七年、去る七月廿六日午後二時より神樂坂相互倶樂部に於て、聲義會主催同會の有志出演のもとに追善義太夫會が催ほされた。番組左の通り。

手向原（ひばり、絃平）宿屋（里芳、勝助）安達（喜代子、三福）合邦（冠之、勝八）鳴門（ときわ、染登）十種香（光華、素女若）玉三（壽瓢、綾秀）新口村前（和風、染登）同後（貴昇、染登）壺坂（喜聲、素女若）矢口（叶、絃平）帶屋（春和、絃平）佐太村（うつぼ、絃平）

万字會生る

久しく休演中であつた小塩潮氏は、舊友諸氏の勸誘にてこゝ四五年振りで素義界に再交、三上榮笑、濱野若狸、荒木泉の三氏と四名にて六月より『万字會』を組織し、第一回を喜久本會館にて第二回は交正倶樂部にて開催、第三回は九月初旬入谷倶樂部に於て開催する事になつた。

五十義會創立者黑柳柳氏談にて「故人高座逸話」がありますが、本號は記事輻輳の爲め次號に掲載致します。

なほ皆樣の高座失敗談や逸話の御投稿を歡迎します。

各地通信

歡迎通信

文樂會（安東市）

國粹安東素義文樂會は七月三日午後七時半より松月館に於て納凉素義會を開催、盛會裡に終了せり。（金桶暉鳳報）

朝顏（新笑）陣屋（暉鳳）安達（美昇）鳴門（錆昇）絃（雛助）

淨瑠璃大會（高山市）

名古屋素義界の名士長尾仙昇氏、鶴澤廣三郎氏は先年御來高名曲を演ぜられ、其餘音今尙耳を去らず、然るに今回地狀視察として來高を重ねらる、依て此機を逸せず銃後國民の志氣喬起に資せん爲め出演を乞ひ左記番組の通り開催す。主催（千年會、斐太因會、倭會）八月三、四日午後七時より高山市有樂園にて。【初日】鮨屋（木阿彌）城木屋（音琴）寺子屋（仙昇）【二日目】太十（木阿彌）野崎（音琴）彌作（仙昇）絃（廣三郎）

佐渡俳句會

七月八日河原田三洲樓に於て開く。出席者古半、烏賊、蓁々、秋子、天南、夕陽、池水、安屯の諸君、席題「茂」「短夜」「螢」金北山を眺め、青田風をうけ乍ら一題五句以内をものし、終りて宴に移り、美津枝、敏技など佐渡美人のもてなしに十一時散會。

茂

吊り橋の下千仞の茂かな　秋子
水樓の茂り出て行く小舟あり　同
何鳥ぞ茂りこだまし溪越しぬ　蓁々
茂り上る海開き來て雲早し　同
賣卜者老いし境内茂かな　安屯
對岸の茂り吊り橋ゆれやまず　同
牧唄聞こゆ村とび〳〵の茂かな　烏賊
日の斑置く茂の椽に紙魚を掃ふ　古半
晝暗き古刹の茂り時鳥　夕陽

短夜

淡き羈愁に人醉はずして明易き　古半
短夜やよき人泊めし草の宿　同
峠越す祭魚や明易し　安屯
そゝくさと短夜の羽織たゝまれぬ　同
朝舟に急ぐ人あり明易き　池水
短夜や田甫の中の話し聲　秋子
旅愁新らた明易き灯の瞬けり　烏賊

螢

君を迎へて酒呼べば螢東西　烏賊
水打てば竹に聲ありとぶ螢　同
汽車通じ荒びし宿場や草螢　古半
もやひ舟米洗ふ音やとぶ螢　同
低ふとぶ螢や町の雨上り　秋子
水吹けば皆光りたる螢かな　同
下向路や淋しき雨にとぶ螢　池水
水よりの風草よりの風螢とぶ　安屯

☆　☆　☆　☆

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀨いろは氏　鈴木一司氏　木村信氏　宮原以興子氏　吉川浪補氏　櫻井呂光氏　阿部一氏　橋本梅月氏　菅原葉光氏　菅田梅笑氏　北島北斗氏　佐藤平之助氏　中澤巴氏　安藤どくろ氏　吉田登盛氏　小川都山氏　安藤都竹氏　安藤昇氏　保々長平氏　緒方千晴氏

栗原千鶴氏　久米中次氏　岸竹史氏　松本千鳥氏　神馬里芳氏　岡本柳光氏　林林昇氏　本木大熊氏　鈴木和樂氏　小林和舟氏　林和勢氏　青山和狂氏　鈴木和勇氏　飛石かなめ氏　加藤兜氏　高橋可遊氏　西田可松氏　黑川叶氏　高山和子氏　大用大嘉津氏

小森叶昇氏　田口辰壽氏　疋田大龍氏　井上巽氏　小林太二八氏　根本團壽氏　野田高尾氏　杉山橘氏　坂倉素遊氏　新川月美氏　川口子太郎氏　小埜長ろと氏　宮本武藏氏　萩原うぼ氏　乃村乃菊氏　中野吳羽氏　石川華笑氏　本城冠之氏　山下彌生氏　國井やまと氏　岡田彌聲氏　松林福笑氏　長谷川文久氏

川田二三樂氏　上杉文盛氏　鈴木兒雀氏　安藤光樂氏　水戸部壽氏　原田越巴氏　河野國聲氏　松岡語松氏　田中湖月氏　湯淺光玉氏　保谷紅司氏　山崎向陽氏　岡崎円六氏　寶藏寺天昇氏　堂野前鐵幹氏　大築葵氏　及川旭氏　柳有明氏　中川愛氏　藤牧淡路氏　奥村三玉氏　寺岡三幸氏　木村さか生氏　齋藤山生氏

平井榮氏　橋本三司氏　藤田三壽氏　細川清氏　金田金鳳氏　錦錦松氏　淺田奇聲氏　星野桔梗氏　日野金泉氏　前島貴昇氏　歸山歸世花氏　平井軌外氏　橋本掬月氏　乾桔梗氏　增田喜城氏　增田喜香氏　澤部鏡鳳氏　三浦其角氏　岩木義雀氏　吉良蟻若氏　山田義昇氏　三並義昌氏　保坂有曲氏　岩田末成氏

高瀨操氏　吉田美地句氏　横井三由氏　野口みなと氏　北村三葵氏　池田三國氏　吉田三芳氏　高橋宮古氏　村上美津豆氏　須田美義氏　鈴木松寶氏　小原松樂氏　勝田松雨氏　菊池秋月氏　花房紫蝶氏　平井壽樂氏　山田壽瓢氏　田口司重氏　倉田司樂氏　濱口秋華氏　打矢晋水氏　武笠宏亮氏　高品一重氏

平山平茶氏　桑原美峰氏　池田美尚氏　魚崎美福氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清華氏　塚口清雀氏　富岡生昇氏　沼井盛鶴氏　時田靜史氏　關口靜香氏　仁木翠松氏

（地方之部）

米國　平野一昇氏
同　武榮玉氏
同　杉山陶岳氏
同　兼廣廣玉氏
同　西本西紫氏
大阪　氏家鶴峰氏
神戸　岡田源氏
大垣　吉岡十八公氏
船橋　川奈部銀司氏

下關　保良鈴鳳氏
横濱　和田和朝氏
同　霜島錦司氏
同　鈴木香雀氏
同　田中呑笑氏
松戸　木下松玉氏
平塚市　國森鳴門氏
八幡　古賀大彌氏
安東市　岩崎山彥氏

新名譽會員

上杉文盛氏

本誌後援名譽會員を御快諾賜り難有奉深謝候

太棹社

當座帳

▽福本卯雀氏　奉天市江ノ島町四番地へ轉居。

▽安藤鶴夫氏　都新聞調査部より文化部演藝へ轉任。

▽林一樂氏　兵庫縣福良町淨曲奬勵五十議會々長林一樂氏は和樂と改名。

▽大山一徑氏　豐島區西巢鴨一丁目三四三〇番地へ轉居。

▼野澤修聲師　日本義太夫因會並に邦樂協會義太夫部に入會。

▼豐澤廣助師　明治座に於ける文樂座豐澤廣助師の後援會日割は三、六、九、十五、十八、廿四日。申込所（京橋區木挽町四ノ二佐倉屋旅館方豐澤廣助後援會、電話京橋五四四番）

寄贈新刊

▼土▼淨曲新報▼露▼みどり▼藝▼京城のラヂオ▼淨瑠璃時報▼淨曲研究▼淨瑠璃月報▼風▼淨瑠璃雜誌▼大日本淨瑠璃界▼可樂▼文樂▼寶塚月報▼梨園▼明るい家▼五代目圓生佛（齋藤拳三氏著）▼女義昔話其他（岡田蝶花形氏著）

編輯後記

★**讀者倍加運動**　最近本誌愛讀者の增加致しました事は素晴らしいもので、弊誌が意外の好評を博し、全國各地は申す迄もなく遠く海外在住の皆様より續々と購讀御申込をいたゞく様になりましたのはつまり我々義太夫界が、吾社の目的に合致してゐる事を欣ぶ次第であります。就きましては此際讀者倍加運動を起し、皇紀二千六百年を記念に、より一層の進展を致したいと存じます。それには皆様の御援助を俟つ事は申す迄もなく、御一名一人づゝの新讀者を御紹介賜りますれば、今までの千名の讀者が忽ち二千名となりますわけで、何卒此の讀者倍加運動に御助力の程を偏に御願ひ申上ます。

★**御禮**　なほ小生、本年は近年稀な猛暑に神經痛甚しく、一昨年佐渡で腰の拔けた時同様の强痛で困難致しました處、皆様よりあの醫師との藥と種々御懇切な御教示を賜り御見舞狀に接しました事を難有御禮申上ます。（芳河士）

第百十七號　（毎月一回十日發行）

定價		廣告料	
一部	金三十錢 郵稅三錢	普通	一頁 金貳拾圓
六月分	金一圓八十錢 郵稅共	特別	一頁 金參拾圓
一年分	金三圓 郵稅共		

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但三錢切手の事

昭和十五年八月八日印刷納本
昭和十五年八月十日發行
東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所　電話牛込一四五一番
東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社　振替東京三一七八五番

帝都素義名鑑の延刊に就て

弊社が『帝都素義名鑑』の發行を企てました處、御賛同を賜り多數の御申込みを得ました事は誠に難有御禮申上ます。

ところで、此の發行の遲れましたことは、早く御申込みの方々には何んとも恐縮に堪えません。弊社も又これ程に延刊するとは思はなかつたのですが、取りかゝつて見ると中々むづかしく、それに折角企てました事でもあり、今後の發刊は十年二十年後淨曲界の一變した上でなくては出來ませんので、此際お一人も多く洩らさじといふ念願から、〆切も附さずに皆様に勸誘申上げてゐました處、後から〳〵と續々の御賛助御申込みに接しますので、遂に慾も手傳つて延刊といふ有様、昨年から御申込みを賜り未だ御寫眞の拜借出來ぬ方々も澤山ありますが、外の事とは違ひ强請する事もなりませんので、何卒お早く御撮影下され御貸與の程を願上げます。

なほ此際何卒御誘ひ合はされ弊社の此の記念事業の御援助を賜り度偏に御願ひ申上ます。

紙もだん〳〵高値を示し定價も計畫當時のものでは困難を生じますので、いづれ今後は〆切を附して發行を急ぎ度く存じますが、〆切後の御申込みは一冊十五圓或は十七圓の定價となる事も止むを得ないと存じます。

（太　棹　社）

昭和十五年八月八日印刷納本
昭和十五年八月十日發行
（毎月一回十日發行）
太棹（第百十七號）
定價 金參拾錢

高級アパート

綠莊

〇五二ノ二町淵岩區子王

赤羽驛東口下車郵便局裏